第四章「漢字を教えない」のが漢字教育の基本

●……教えてはダメ、母親を真似ながら子どもは言葉を覚える

論語は、まず「学」という字から始まります。

「子曰く、学びて時にこれを習う、また喜ばしからずや」です。学ぶとは真似ぶ、つまり真似ることです。しかし、真似をするだけではすぐにできるようにはなりません。そのためには同じことを一〇〇回、二〇〇回と繰り返さなければいけません。

「習」という字は、鳥が“羽”を“百回”も羽ばたくという意味です。卵から孵った雛は、親のすることを真似します。つまり「学」です。しかし一回や二回やったからといって、飛べるようにはなりません。一〇〇回も二〇〇回も繰り返してやらなければ、つまり「習」がなければ飛べるようにはなり ません。

昔の人は「読書百遍」といいましたが、この百というのは、教の多いことを表す言葉で、何度も繰

り返し本を読みなさいという教えです。一回や二回で中身がわかるということはありません。これが「習」という言葉の持つ本当の意味なのです。

繰り返しやれば、今までできなかったことができるようになります。わからなかったこともわかるようになります。だから楽しいのです。つまり自分から学ぼうという意欲がなければ、「学習」とは言わないのです。この「学習」に似た言葉に「勉強」という言葉があります。「勉強」というのは、「強」という文字が示しているように、努力してやることです。先生や親にやれと言われてやることが「勉強」です。「勉強」はあまり効果がありません。

「学習」と「勉強」という意味を厳密に使い分けて欲しいものです。「勉強」は自らやることだと思っているかも知れませんが、勉強というのは、課せられた仕事、つまり責任を果たすために努力することです。本当はやりたくなくてもそうせざるを得ない、それが勉強の本来の意味です。

商売人が「勉強しておきます」というのも、とてもそんな値段では売れないけれども、我慢して、その値段で売りましょうということから“勉強”という言い方をするのです。

勉強は学習に比べて効果は少ないということを知ってください。学問というものは自分から進ん

でやらなくては効果がうすいのです。

ポイント:私たちの胃袋は食べたものを消化、分解しますが、これは工場並の高度な設備が必要なのです。でもそれを無造作にこなしているわけです。そして頭の中はもっと複雑で高度なことをやってのけています。頭は単に言葉を記憶しているだけでなく、消化して法則を作り出しているのです。そうでなければ、幼児でもちゃんと五段活用ができることの説明がつきません。

●……子どもの意欲の芽を摘むな

遺伝は大切な働きをしています。しかし、立派な両親から優れた子どもが生まれるわけではありません。脳は使うから発達するわけで、いくら遺伝的な要素がよくても、使わなければ脳は発達しません。

ただ、親が学者とか芸術家の場合、子どもも親と同じ道を歩くというケースが少なくありませんが、これは遺伝ではなく環境が影響しています。子どもは親の真似をしますから、その真似をするお手本が身近にあれば、親と同じような道をたどることが多いのです。

では、立派な能力を持っていない親ではダメかというと、そんなことはありません。いい手本を示そうと努力すれば、それでいいのです。

子どもは生まれながらにして、自分の能力を使いたいという強い欲求を持っています。親のやることを見れば、すぐ真似をしようとします。ところが、そうした子どもの欲求にブレーキをかける親が多いのです。アレをやりなさい、コレも……と大方は干渉過多になっています。

親が教育に熱心なあまり、あれこれと指図すると、自分で積極的にやらない子どもになります。せっかくもって生まれた子どもの意欲をダメにしているのは親かもしれません。教育と称して干渉するあまり、かえって子どものやる気をなくしてしまっているのです。

そういう意味では、むしろ親が忙しくてまったく見てやれなければ、子どもはやりたいことを自由にやれますから、意欲が発達します。遊びでも何でも自分で考えたり、頭を使うから、頭の働きがよくなります。幼児期くらい、自らやろうという意欲の強い時期はありません。赤ちゃんを見てください。歩けない赤ちゃんが歩こうとするでしょう。そのときの困難さは、われわれの想像

を絶するものがあります。赤ちゃんにとって立って歩くということは、まだ不可能なことなので、それこそ何回倒れるかわかりません。それでも、諦めてしまう赤ちゃんは一人もいません。

●……幼児の「なぜ」には必ず答えてやる

いざ漢字を教えてみると、本当に覚えたかどうかがどうしても気になります。いくら脳を活発化させるとはいっても、どこまでわかったのか、親は気になるものです。

まだ言葉の発音が完全にできない時期でも、親が「目」という漢字を示せば赤ちゃんは目に手をやるようになります。「耳」を示せば耳を触るでしょう。

こういうことをするようになれば、その漢字の意味は理解できたと言えます。しかし、それが漢字教育の目的ではありません。漢字で脳を活性化するのが目的です。頭を使うことが頭を良くすることなのですから、どの漢字がわかってどの漢字がわからなかったということは、あまり神経質になる必要はないのです。

教える漢字の数にしても、言葉がしゃべれない幼児のうちは、あまり数を増やさなくてもいいのです。」実際に言葉が発せられるようになったら、子どもの反応を確かめながら、数を増やしていけばいいのです。

言葉がしゃべれるようになってくると、幼児は知識欲が旺盛になって きます。

「これ、なあに?」と質問を矢のように投げかけてきます。

この質問にはきちんと答えてやりましょう。忙しいから、とこれをおろそかにすると、幼児は質問をしないようになります。

ただし、勘違いしてはいけないのは、幼児が欲しないことはそのままにしておくことです。知りたくないときに無理やり教え込めば、これは消化不良になって逆効果です。子どもの欲することにだけに答える、ということを母親はとくに認識しておいたほうがよいでしょう。

●……幼児語は使わないほうがいい

幼児に話しかけるとき、つい幼児語を使ってしまうことが多いものです。どうしても幼児語というのはかわいらしく聞こえるので、つい大人のほうがそれを使って話しかけてしまいがちです。しかし、言葉は最初が肝心です。幼児語を使うことは避けてください。

幼児は「さしすせそ」と「らりるれろ」が発音しにくく、「さ」は「だ」に、「ら」は「だ」になりがちです。これはまだ正しい発音ができないのですから直そうとしてはいけません。

しかし、だからといって、親までが幼児語でしゃべっていれば、それが正しいと思って記憶されてしまう危険があります。結局、また直さなければならないのですから、最初からきちんと話したほうがいいでしょう。

幼児は最初は「ダジオ(ラジオ)」でもいいのです。

でも、親は「ラジオ」と言いましょう。子どもは親の真似をします。真似ながら学習していきますから、そのうちにその発音の違いに気づき自然と正しく言えるようになります。いいお手本を見せていれば、子どもはそれを取り入れようとするのです。

初めはきちんとしゃべれなくても、親の言葉づかいをしっかり聞いていますから、すぐちゃんと発音できるようになります。幼児のこうした能力には目を見張るものがありますから、親もそういうことを踏まえて話してやることが大切です。

> ポイント：大切なことは、あくまでも赤ちゃんの頭を使わせるということです。頭を使うということが頭をよくすることなのですから、どの字が読めてどの字が読めなかったということは問題にする必要はないわけです。

●……テレビの「音」では脳は発達しない

子どもは、母親の言葉を通して言葉を頭の中に蓄積させていきます。言葉をつかさどっているのは左の脳です。その他の音声は右の脳で聞いていることは前にも述べました。ですから赤ちゃんに声をかけるときは、それがちゃんと左の脳に響くように、赤ちゃんを見つめ、心をこめて話しかけ

ることが大切です。

母親の「声」は、ただの「音」とは違うということを認識してください。そうすれば赤ちゃんはその声に応えてしゃべろうとし、脳の左の部分が発達していきます。

小さい時からテレビで育った子どもは、母親の声にあまり反応しないし、声をかけても反応が鈍く、自分だけの世界に閉じこもりがちといわれています。これはテレビの音は、人間がしゃべっていても、あくまでも機械の出す音だというところに理由があると思います。機械の音ですから、声ではなくて単なる音と変わりありません。

その音は右の脳で処理されています。また、子どもがテレビに反応して応えても、相手からは何も追ってこないのです。したがって右の脳は発達しても、言葉脳である左側の発達は遅れています。それで言葉に対する反応が悪くなっているのです。

言葉を覚えるまで、つまり子どもが三歳になるまでは、テレビは避けて欲しいという理由はここにあります。脳の神経細胞がもっとも発達する大事な時期でもあるし、後から手遅れにならないよう、親として細心の注意を払う必要があります。

最近、幼児向け教育ビデオを利用するお母さんが多いようです。たとえばおやつを食べるときは、テレビ画面から出る「いただきます」という音声に合わせて、幼児も口をそろえてしゃべります。挨拶のしかた、食事などのしつけから、教育まで、まさにビデオがお母さんの代行をしているのです。

しかし、幼児の視力が落ちたとか、失調をきたした例も少なくないようです。やはりしつけはお母さんが直接行うべきで、いくら便利だからといって、何もかもテレビに押しつけるようなことは望ましくないでしょう。

●……テレビの「音」では脳は発達しない

子どもは、母親の言葉を通して言葉を頭の中に蓄積させていきます。言葉をつかさどっているのは左の脳です。その他の音声は右の脳で聞いていることは前にも述べました。ですから赤ちゃんに声をかけるときは、それがちゃんと左の脳に響くように、赤ちゃんを見つめ、心をこめて話しかけ

ることが大切です。

母親の「声」は、ただの「音」とは違うということを認識してください。そうすれば赤ちゃんはその声に応えてしゃべろうとし、脳の左の部分が発達していきます。

小さい時からテレビで育った子どもは、母親の声にあまり反応しないし、声をかけても反応が鈍く、自分だけの世界に閉じこもりがちといわれています。これはテレビの音は、人間がしゃべっていても、あくまでも機械の出す音だというところに理由があると思います。機械の音ですから、声ではなくて単なる音と変わりありません。

その音は右の脳で処理されています。また、子どもがテレビに反応して応えても、相手からは何も追ってこないのです。したがって右の脳は発達しても、言葉脳である左側の発達は遅れています。それで言葉に対する反応が悪くなっているのです。

言葉を覚えるまで、つまり子どもが三歳になるまでは、テレビは避けて欲しいという理由はここにあります。脳の神経細胞がもっとも発達する大事な時期でもあるし、後から手遅れにならないよう、親として細心の注意を払う必要があります。

最近、幼児向け教育ビデオを利用するお母さんが多いようです。たとえばおやつを食べるときは、テレビ画面から出る「いただきます」という音声に合わせて、幼児も口をそろえてしゃべります。挨拶のしかた、食事などのしつけから、教育まで、まさにビデオがお母さんの代行をしているのです。

しかし、幼児の視力が落ちたとか、失調をきたした例も少なくないようです。やはりしつけはお母さんが直接行うべきで、いくら便利だからといって、何もかもテレビに押しつけるようなことは望ましくないでしょう。

●……テレビに子守りをさせない

現代のようにテレビばかりと向き合っていると、自分の頭を使わなくなるということもテレビの弊害の一つといえるでしょう。

たとえば名作がテレビ化されたとします。それを見るのと本で読むのとでは全然違うのです。

本を読んで、自分の頭でそれを味わって描いていくことこそが大切です。

自分の頭で描くものは、どんな立派な作品より美しいのです。それがテレビという安易なものを通してでは、自分で考えることをしないで与えられるだけになりますから、子どもの脳はあまり刺激されないのです。

赤ちゃんの頃はテレビはあまり好ましくありません。少なくとも最初は益よりも害のほうが多いでしょう。ある程度言葉が認識されて、テレビから流れる言葉がわかってくるようになって、その番組が内容のあるものでしたらもちろん有益ですが、コマーシャルのやたらと多い民放番組をつけっ放しにするようなことは問題があると思います。

私の子どもが幼稚園や小学校低学年の頃は、「名犬リンチンチン」とか「名犬ラッシー」とか三〇分番組がありましたので、これを一日に一つだけ選んで見せていました。内容のこともありましたが、それ以上にテレ ビの画面を長時間見ることは目を悪くすると思っていましたから、一日に見る時間を決めていました。兄妹で毎日相談して見ていたようです。

小さいときの習慣というのは抜けないもので、娘は今でもあまりテレビを見ないようで、食事をするときなども静かに食べることを好むようです。ただし小さい時からベートーヴェンやシューベルトのレコードをよく聴かせていましたから、クラシック音楽は好きで、いつも流しているよ うです。

私の子どもの頃と追って、テレビが氾濫している時代になっていますから、まったくテレビを見せないということは無理でしょうが、テレビに子守りを押しつけるようなことは絶対に避けるべきでしょう。

●……家庭教育の重要性

家庭教育というものは、夫婦が同じ方向で子どもを育てようとしない限りうまくいきません。どんな子どもに育てるのか、どんな教育をするのか、しっかりと話し合うことが必要です。

できれば、子どもが生まれる前から夫婦で相談しておくことが大切です。夫婦の一番大きな仕事というのは、子育てだからです。

いくら父親が外で働いているといっても、わが子を立派に育てる責任は、母親と半分ずつ持たな

くてはなりません。よく話し合って、両親が納得した上で育てることが大切です。

どんなに忙しい父親でも、子どもの教育というのは楽しいはずです。子どもと遊ぶということは気分転換にもなります。

そういう意味では、父親の役割も非常に大きいのです。無関心であっては困るし、ましてや子どもの教育に対する考え方が母親と反対というのでは困ります。

教育の「教」という字の右側には「父」という文字が使われています。昔は、父親は外に働きに行くのではなく、家の中で仕事をしていました。子どもは、父親の仕事を見て育ちました。そして父親のやり方の真似をします。真似をすることを、日本では「真似ぶ」といいました。

この「真似ぶ」という言葉が「学ぶ」に変化したのです。今使われている「学ぶ」とは少しニュアンスが違って、本来は真似ることを意味しています。では、誰の真似をするのかというと、父親です。真似をしたときに、指導助言をするのが父親の仕事です。

「そういうときにはこうするんだよ。それじゃ手を切ってしまう……。こういうように持ってやれば怪我をしないんだよ」

これが“教える”ということなのです。

教育の本質は父と子が交わることです。一緒にいることが教育の原点なのです。そして子どもが自主的に父の真似をする、これが学問の「学」の始まりです。学ぶときには、当然のことながら父親が指導助言します。それが独立して「教」という字になるのです。漢字の成り立ちから調べていくと、「教」という字と「学」はまったく同じなのです。

ポイント:テレビで育った子どもには、自分で自分の世界、つまり煩わしくない自分一人の世界に閉じこもってしまい、言葉が吸収されなくなっているケースが多く見られます。たくさんの言葉が頭に入らないから頭脳が発達しません。いろいろな言葉を使って体験を頭の中に認識できないと、智慧というものは蓄積されないわけ です。

●……天才は学校教育の中からは生まれない

知能は幼児期に形成されます。つまり家庭教育が一番大事なわけです。家庭教育さえしっか

りやっていれば、今の普通の小学校の教育はバカバカしく感じると思います。たとえば欧米でノーベル賞をとるような学者は、小・中学校には行っていない人が多いのです。また、一二、三歳で大学に入学しています。入学試験さえ通れば年齢を問わず入れてくれるわけです。

数年前の話になりますが、イギリスのケンブリッジ大学を一六歳で卒業したという少女がいました。数学科を何と主席で卒業しているのです。そしてこの少女をアメリカのハーバード大学が教授に迎えたというのです。驚いたことにこの少女は、小学校、中学校、そして高校には一日も行っていないのです。父親が家庭で教育したそうです。

この父親というのがなかなか面白い人で、自分の子どもは個性が強いから、学校へやったらダメになってしまうと思って、自分で教育する決心をしたそうです。もともと普通のサラリーマンだったのですが、奥さんに「すまないが働きに出てくれないか。私は家にいて、炊事洗濯から子育てまで全部やるから」と言って、夫婦の分担をちょうど逆にして、この少女を教育しました。

私もこういった教育法には賛成なのです。それは個性に潰されないほど強い子どもならいいのですが、何といっても今の学校教育は画一的すぎると思うからです。だいたい試験のために勉強する

のはおかしいです。

私自身、中学生の時には試験勉強は一切しませんでした。試験は自分の実力を測る「ものさし」の一つではあるけれど、試験の前日に一生懸命丸暗記して、それでいい点が取れたとしても、それはとても愚かなことのような気がしたわけです。試験の前になるとかえって普段しないようなことまでして遊んだものです。臍曲がりといえばその通りですが、それでも成績は悪くなかったです。

もちろん人間の脳はいろいろな要素が絡み合ってできあがりますから、一概にこうと言い切ることはできませんが、やはり家庭環境は強く影響しているといえるでしょう。

私の場合、両親は何かを教えてくれるということがなかったので、幼児期には独りぼっちでいろいろなことを空想する、つまり一人遊びが好きでした。与えるものが多すぎるのはダメで、自主的に考えることこそ大切だと思ってます。

●……読み方が間違っても神経質になるな

子どもが漢字を間違って読んだとしても、神経質になってはいけません。たとえば「鳥」という字を習った子どもは、「島」を見ても最初は「鳥」と読みます。これは仕方ないことなのですから、責めてはいけませ ん。

「『鳥』と『島』を比べてごらんなさい。どこが違っているでしょう？」

「あっ、こっちは点々でこっちは山だ。山がつくと『島』になるんだ」

こういうことで覚えた漢字は決して忘れません。もう「鳥」と「島」を間違えることはありません。つまり子どもに納得させることが肝心なのですから、間違ったからといって叱ったり神経質になる必要はないわけです。

漢字を教えるといっても、ただむやみやたらに教え込んではダメです。たとえば鳩や鶴を教え、そこから鳥を教え、そうして島にいたるような、ある程度の系統立てはあったほうがいいでしょう。こういう覚え方で、幼児は理解しながら漢字を覚えていくのです。

●……鯨は哺乳類なのになぜサカナ偏になっているのか

「鯨」という字があります。漢字を学んだ子どもがこの字を見れば、当然「魚」の仲間だと思います。でも鯨は魚類ではなく哺乳類ですから、かえって誤解を生ずるのではないかと心配される方がいるかもしれま せん。

しかし、そんな心配は必要ありません。鯨は海に生息していますので、元来魚の仲間だと思われていて、この字がつくられたのです。ですから、もし「鯨は魚の仲間だね」と言ったとしたら、「魚」の概念を捕らえているのですから、むしろ褒めてやるべきなのです。

そして、その後でこんな話をしてあげましょう。

昔は魚の仲間だと思われていたんだけれど、今ではそうでないことがわかったんだ。魚はとてもたくさん卵を生んで、その卵から出て来た魚の赤ちゃんは、自分たちの力で大きくなるんだよ。でも鯨は卵ではなくて、牛や馬と同じように赤ちゃんを産んで、お母さんがオッパイを飲ませて育てるんだよ。だから牛や馬と同じ仲間だということになるんだ」

こうすると鯨という字がきっかけとなって、かえって新しい認識が生まれてくるのです。こうして得た知識というのは、しっかりと身につくものなのです。

ポイント:難産とか事故とかで小さいときから脳に障害がある場合は、よけい早くから言葉をかけてあげなくてはダメなのです。多少脳に障害があっても、全体が障害に冒されていることはないわけですから、声をかければ健全な部分の脳はどんどん受け取って、頭が回転していきます。頭が働いてくると目の輝きも変わってくるのです。正常な子どもにも負けない学習能力も身につきます。

●……漢字は書けなくてもいい。読んで意味がわかれば十分

幼児に漢字教育をすることをためらう原因の一つは、漢字は書けなければいけないという先入観です。しかし、漢字は書けなくてもいいの です。

日常生活の中で、「書く」ということは不可欠の要素ではありません。字が書けなくても不都合

なことは、ほとんどないのです。書くというのは、仕事として漢字をたくさん知っていなければ困る職業の人がやればいいことで、そういう人は自然に生活の中から身につけていきます。また、書くということは自分の思いを表現することですから、少なくとも小学校の中・高学年になってからやればいいのです。

幼児期には読めさえすればいいのです。書ける必要はまったくありません。そもそも漢字を全部書けるようにするために、一生懸命に漢字の書き取りをさせるというのは、実にバカげたことです。かりに漢字がすべて書けるようになったとしても、幼児や子どもにとって何のプラスになるかを考えればわかることです。幼児がものを書くことはまったくないし、子どもが手紙を書くこともほとんどないのです。

一方、文字を「読む」という行為は、四六時中つきまとっています。朝起きてから夜寝るまで、私たちは文字を見て、そこでいろいろと判断しなければなりません。文字を通していろいろな情報や知識を獲得しなければなりません。

漢字が読めなくても、辞書を引けばいいじゃないか――という反論が出そうです。しかし、この

忙しい時代、読めない漢字を辞書で調べるということはなかなかできません。現に、朝の忙しいときに、読めない漢字が出て来たからといって、辞書を引いたような経験があるかといったら、ほとんどの人はないのです。漢字というのは読めて、意味がわかることが大切なのです。

漢字は読むものだという観点にたって、たとえば「鳩にという言葉で考えてみましょう。

これは「は」という音と「と」という音の二つが組み合わさってできています。しかし「は」を聞いた時には「と」はまだ出てきませんし、「と」という音を聞いたときには「は」はもうないのです。

時間的に食い違っているわけですから、それを「はと」としてまとめることは、幼児の脳の仕事としては大変な作業なのです。こういう音声の結びつきを頭に記録するのは、子どもにとって非常にむずかしいこと なのです。

●……推理する能力があるから知らない漢字も読める

こういう話があります。ある幼稚園の先生が黒板に「悪魔」という漢字を書いて「誰かこれ読めるかな？」と聞いたのです。

当然誰も読めませんから、「じゃあ、教えてあげようね」と言ったら、「先生、待って。自分たちで考えるから」と子どもたちが言ったのです。

子どもたちは相談を始めて、悪魔の魔という字には下のほうに「鬼」という字があるから、じゃあ鬼の仲間だ……こうしてだんだん話を詰めていって、これはどうも悪魔じゃないかというようなことになりました。

「先生、それ『あくま』っていう字じゃない？」と言ったので、びっくりしたそうです。幼稚園の園児です。

この例を紹介したのは、二つの意味があります。

一つは、三、四歳の子どもでも「推理する能力」があるということです。それともう一つは、これが一番大切なことですが、子どもというのは、基本的には教えてもらいたくないのです。知りたい、自分で解決したいという気持ちがあるのです。これが人間の本性なのです。

赤ちゃんの身の回りに漢字があれば、「これ何だろう」と知りたがるものです。それに対して、

「こんなことは学校に行ってから習うのよ」と言って教えないお母さんがほとんどです。でも、子どもが知りたがっていることは何でも教えたほうがいいのです。

しかし、詰め込みはいけません。また、先走ると失敗します。聞かれたときは教え、聞かれないときは教えない――これが基本です。教えるということは、子どもが解決するという力を使わないことになります。自分が求めて知るのと、与えられて知るのとでは天地ほどの違いがあります。

求めるということは、自分の頭を使うわけですが、教えられるとは、そのような頭の使い方をしません。自分で解決するのと教えられるのとは違います。教えられたものというのは、ある意味からいえば本当の力ではないから、わかったつもりでも、今度それを表現することはできません。

自分で考えながら歩いた道はいつでも歩けますが、知っている人について歩いた道というのはひとりで歩けと言われても歩けません。それだけの違いがあるのです。幼児でも自分で知るだけの力があるのです。

●……漢字を知っていると読書スピードは二倍三倍も速い

最初から漢字を習った子どもと、“かな”から始めた子どもとでは、読書のスピードが違うことも発見しました。もちろんこれは個人差もありますから、すべてがそうだと一概には決めつけられませんが、かなで習った子で、かなり読書の早い子どもでも、漢字から学習した子には全然かなわないのです。

息子が子どもの頃本を読んでいるときに、試しに息子の後ろから私も読んでみたら、まだ一ページの半分くらいしか読み終えないうちにページを繰っていました。私もスピードをあげて追いつこうとするのですが、次のページも、また次も同じでした。

それで、こんなに速く読んで本当に中身が理解できているのかな、と思って内容について質問をしてみました。すると、きちんと答えることができ、内容も理解していました。「速く読みとること＝理解力を高めること」と気づいたのです。

こんなこともありました。息子が幼稚園のころ『ロビンフッドの冒険』という絵本を買って与えたことがあります。その中に、ロビンフッドが捕まって縛られている挿絵がありましたが、息子は、「お父さん、この絵は追っている」と言うのです。

文章の中では、ロビンフッドは騙されて角笛を奪われたのに、この絵のロビンフッドの腰に角笛がブラ下がっているのはおかしい、と。幼稚園の子どもがこんな指摘をするのです。ただ字を追って読んでいるだけでなく、内容もちゃんと理解していることがわかりました。

私たちは、“かな”から入っているので、速読術でも習わない限り、速くは読めません。しかし、初めから漢字で習えば、こういう能力が自然に身につくのです。最初についた習慣というのは、後々まで身について離れないのです。

私は息子に対して、幼稚園の間に小学校で習う漢字が読んで意味がわかるようにさせました。幼稚園のうちから小学校五、六年生の本がスラスラ読めたのです。

小学校に入ったときに、百科辞典を買ってやったら、たとえば、外で遊んで帰って来てから何をしているのかと思えば、今までに見たことのない草花があったので調べているのです。

漢字を読む力さえあれば、小学校の一年生でも百科辞典でどんどん調べるのです。そして新しい知識をどんどん吸収するのです。

●……読書の面白みを教えてやることが大事

子どもを本好きにさせるには、読書が面白いということを、わからせる必要があります。

そのために、まず本を読み聞かせるということをしました。子どもがもっと小さい時には、寝かしつけるときにお話をしてやったものです。と にかく毎晩毎晩話をしてやることが大切だと思い、続けました。

何の話をしてやったらいいかわからない、という親もいますが、適当な作り話でいいのです。

「ボーンボーンボーン、時計が鳴りました。何時になったでしょう？」

こんな話でも子どもは満足して聞くものです。

まず、親子で会話をすることによって関係を深めるということが一番大切です。子どもが満足するまで相手になってやる、ということが大事なのです。

毎晩、子供のほうから「もう寝ようよ」と言って、一緒にベッドへ入ると いう習慣もつきます。話をしてやっていれば、そのうちに寝てしまいます。相手になってやることは、親としても楽しいし、そ

のうちにちゃんとした物語りをしてやるようにすればいいのです。

小さいうちは、親の作り話でもいいのです。昼間庭で遊んだことを話題にするのもいいし、何でもいいのです。年齢に応じて段々とストーリーのある物語りに進んで行けばいいのです。

次は、夜、何時になったら本を読み聞かせると決めます。長い物語になると途中で切ります。もっと聞きたいと言っても、「このお話はまだまだ続きが長いから、今日はこれでおしまい」というようにします。

すると子どもは、どうなるんだろうと思いながら次の夜を待つわけです。そこでお話を続けます。そういう繰り返しで、自分自身で本を読みたいという気持ちが起こってくるものです。

ものには順序があります。いきなり本を読みなさいとか、漢字を見せてもダメです。子どもが自分からやるように仕向けなくてはいけません。

こういう本なら読んでみたいと思っても読まなかったら、何にもなりま せん。無気力な人間を作ってはダメです。人間は生まれた時から大いに意欲を持っているのに、三歳を過ぎる頃から無気力になるというのは親がそう仕向けたのだと言わざるを得ません。

●……できる限り漢字の多い本を

最近、マンガやテレビばかりに夢中になって本を読まないという悩みの声をよく聞くことがあります。しかし、幼児期から漢字に親しんだ子どもはその反対で、タメになる本をよく読みます。むしろマンガやテレビよりも好むようです。というのは本(書物)は好奇心を満たすことに十分な楽しい中身をもっているからです。

にもかかわらず、子どもが本を読まない理由は二つあります。一つは書物の面白さを知らない、もう一つは知ってはいるが読む力(漢字力)がないかのどちらかです。

前者の場合は、親が本を読んで聞かせることが一番大切でしょう。毎日本を読んでやるのです。子どもは繰り返しが好きですから、同じ本を何度も読んでやります。

毎日同じ話を聞いていると、子どもは話の内容をすっかり覚え、読み間違いを指摘したりするようになります。そうして、自分でも大人のように読んでみたくなります。

私の観察では、ひらがなばかりの本は幼児には読みにくいようです。自分で読もうという意欲が薄れて、いつも親に読んでもらってしまっています。これではいつまでたっても自分から読書する気にはなりません。

食べることで成長するからといって「ハイ、口を開けて」と、栄養のあるものを次から次へと与えてやっているようなものです。こんなことをしていたら、自分で食べる子にはなりません。できる限り漢字の多い本を選んでやるようにしましょう。

ポイント:幼児期に漢字教育をすることは理解できても、やり方を誤解している人が多いのです。詰め込み式で、しかも漢字を書く練習をさせたり、作文まで書かせたりしている場合もあります。たしかに書いたものも大人の目から見ても結構素晴らしい。でも子どものうちは吸収することだけです。ものを書かせ発表したりする能力は幼児のうちは伸ばす必要はないのです

●……「智慧」のある子に育てよう

「知」という字がありますが、口と矢でつくられています。「矢」は速いことを意味するもので、昔は矢より速いものはなかったのです。光陰矢の如しといったように、矢のように速いという形容が、昔からよく使われています。口から早く答えが出てくるということは、頭にその知識が十分にあるということを示しているわけです。

「知」というものは、私たちの頭に入っている知識を総称した字なのです。しかし、この「知」の働きというものは、磨けばもっと偉大な働きをします。この「知」を磨いて、それ以上のものになったときに「智」という字になります。遂に、この「知」が使われないでいると、その機能が衰えてきます。その状態が「痴」です。つまり、これらは元は一つの言葉で、知、智、痴の三つがなければ不完全なのです。ところが国語審議会は、当用漢字を制定するときに「智」の字を削ってしまったのです。

「知」のある人間のことを知者といいます。言葉として知者といえば知者、智者、痴者と三つが考えられるわけです。

しかし、当用漢字が制定された昭和二二年以後、この智者という言葉はなくなってしまったのです。ですから、今の日本には智者がいないのです。たとえいたとしても、それを表現することができ

ません。漢字がなくなると正しい表現ができなくなるわけです。このように漢字というのは重要な働きをするのです。

教育は、知識を増やすのが目的ではありません。常用漢字の中には「智」という字はないけれど、「智慧」というのは本当はこの字でなければならないのです。知識としてはないけれども、ものを解決する能力、それが「智慧」です。そこへもって行かなければならないのですが、学力テストとか入学試験は、知識だけを問題にしています。いかに知識の多い人間を採用するかというのが、今の学校側の姿勢です。

知識というものは、頭の中に入れておく必要はありません。それを取り出す方法さえ知っていればいいのです。いくら頭がよくても、詰め込む知識には限界があります。機械的に知識を詰め込んでも、正確に簡単にそれが引き出せなければ、何の意味もありません。

今は、智慧のある人がいないから、世の中がおかしくなっているのです。頼るのは知識ばかりで、知識を生かす方法、つまり智慧がないのです。

そもそも、現代の教育は、小学校から大学に至るまで詰め込み式に知識を植えつけるだけです。

ようやく知識偏重教育の弊害に気づいたのか、就職試験の際に、学歴を問わないとか、面接を重視するというところも出てきました。会社にとって大事なのは、知識の多い人間より智慧のある人間です。

ポイント:「書く」ことは自分の思いを表現することなのですから、少なくとも小学校の中、高学年になってからやればいいのです。作文教育も、小学校一年生からやるなどということは本当に無意味です。

●……今の小学校入学試験はおかしい

これはある小学校の入試問題です。四つの中から一つだけ「仲間はずれ」を探させる問題になっています。一番と三番はともかく、二番や四番の問題は大人でさえ答えに困ってしまうのではないでしょうか。

このような「分類」というものは、大人が考える知的なものですから、そういう教育を受けない限りはだいたいが未発達です。この問題は要するにものを考える力を試しているわけです。仲間はずれのものを分類する力もひとつの能力ですから、どこかで養わなければいけません。

しかしこんな力を、小学校にも入っていない子どもの入学試験として使うのはどうでしょうか。この時期までにそういう能力を身につけておかなければならないかどうかと言えば、それはまったく不必要と言っていいでしょう。こういう能力はもっと後になって、自然にそういう場面にぶつかって身についていくものなのです。こんなことをわざわざ絵によって考えさせる必要はないのです。

テストというのは落とすためにやっていますから、このようなテスト問題が実に多くなっています。これは練習をすれば簡単にできますが、練習しない子どもにとっては時間がかかることなので差が出ます。こういうこともまったく無意味だとは言いませんし、遊びとして子どもがやっているのならばいいのですが、試験問題として夢中になってやるというのはおかしなことだと思います。

知能テストというのは、練習しないものについて、それを解決するのにどれだけ時間がかかったかで測るものです。このような問題で知能を測定することは、結果があやまって出てしまう場合も

あります。

こういう問題が入試問題になると、たしかに練習を積んだ子どもはいい点が取れるでしょう。しかし、それがその子どもの本当の能力を測定したことにはならないのです。

ところが、合格点を取らなければ入学できないわけですから、その目的には合っていると言わざるを得ないでしょう。何もしないよりはプラスになります。頭を使うことはすべてプラスになることですから。しかし、このような問題で頭を使うよりも、もっともっと実際の生活の中で頭を使うようにしたほうが賢明です。

●……身の回りのことから学習させる

子どもの生活のまわりには、いろいろと頭を使うことが取り巻いています。たとえばお金を数えるとか、お母さんのお手伝いをするとか、いくらでも家庭の中にあるわけです。しかし家の手伝いなんかさせると勉強の妨げになるというふうに考えてしまって、親はただ勉強しなさい、と机の前に

座らせてしまっているのです。勉強だけさせていれば賢くなると、勘違いしてしまっているわけです。

子どもというのは机の前で賢くなるよりも、生活の中で親の手伝いをしたりしたほうが実はずっと頭を使うことになるのです。成長の段階として大事なのです。もし子どもに何か学習させたいのであれば、文字が読めて本を読めるというふうにしてやればいいわけです。

たとえば、毎日来る新聞の中から自分の知っている字を見つけ出させたりするほうが、はるかに頭の働きをよくするのです。

ところが、何か問題をやらせないと学習にならないと思っているわけです。机の前に座ってこういう問題を実際にやっていないと頭がよくならないと考えているのは、大変な誤りです。子どもを選抜する学校側にとっても、こういうテストで子どもの能力を判断して入学させても、果たして望むような子どもがとれるかどうかという疑問があります。つまりこういう問題は解けても、実際には家でお使いもできない、そういう子どもばかり集めても、学校だって持て余すだろうと思うわけです。

もちろんこうした問題が解けるという能力も、まったく意味のないことはないと思います。頭の

トレーニングをするということは、それなりにムダではないでしょう。しかしこのような問題で学校側が子どもを選ぶとすると、問題を事前に準備して訓練している子どもだけが入学できて、そうでない子は入れないということになります。

●……テストでは能力ははかれない

分類などの問題は、一度やっておけばとても楽です。まして何回も何回も練習していたら、すぐにできるようになるでしょう。ところが初めてぶつかった子どもは非常に苦労します。そこで大きな差が出てくるわけです。もしテストするならば、こういう弊害がないような新たな問題をつくることが望ましいと思いますが、でも、なかなかどこの学校でもできることではないかも知れません。

テストというのはすべてを見ることはできないのです。十の問題で千の能力をチェックするのは無理なのです。実際の知識は千や二千ではないですから、それをわずかばかりのテストをすると、たまたま自分の知っている問題が数多く出題された子と、そうでない子が出てきます。

極端なことを言えば、サイコロを振って一を一〇回出すこともあるわけなのです。そういうことから考えると、本当は知識がなくても一〇〇点が取れて、非常に知識が豊富で智慧のある人間が〇点を取るという可能性だってあるわけです。

そんなテストによって選抜された子だけがよくて、できなかった子どもは排除されたなどと思ったら大間違いなのです。

いい学校へ入ったために伸びる子どもと、反対にいじけてダメになる子どもがあるということも、親はよく認識しておかなければなりません。いい学校へ入れれば安心だというような単純な考えで、子どもを自分の思うように動かそうとすることは非常に危険です。

●……学校教育は個性を潰している

入学テストは落とすためにやっているわけです。ですからもしみんなが練習していて、全員がで

きれば、何の意味もないわけです。面接だけで入れるところとか、行動観察をして入学させる学校もあるようですが、そういう観点で選ぶほうがずっといいと私は思っているのです。

とくに大学の付属校は、いわば実験校です。いろいろな子どもがいていいと思うのです。ですから、訓練の結果の知識でテストして、選抜しても意味がありません。何の能力も表してはいないのです。子どもの持つ根気とかヤル気、勇気、覇気などは、ペーパーテストでは測れません。ただ単にそのテストにおいていい成績が出たことにすぎないのです。

テスト問題に引っ掛からなかった子どもが優秀などということはあり得ないのです。それよりむしろ子どもに自由なことをさせておいて、それを試験官が採点するようなやり方がいいと思います。

子どもの自発的な能力を試すことかできます。しかしこれには学校側の対応も必要です。

というのは、学校も教えやすい、忠実な子どもだけを欲しがる傾向があるからです。たしかに先生にとっては楽でしょう。しかし教育の場は先生か楽をするところではなくて、子どもの才能を伸ばすところです。先生は苦労しなければいけません。こういう意味で言いますと、今の学校教育

は個性を潰すようなやり方です。個性を潰されないほど強い子どもならいいのですか、何といっても学校は画一的すぎます。だいたい試験のために勉強すること自体ナンセンスです。

> ポイント:一、二歳の幼児は、とにかく親に甘えてきます。こういう時に漢字を使って相手になってやるのです。子どもの寂しい気持ちをこれによって満足させてやるのです。

●……言葉を使って体験を表現させることが大切

幼児への試験は大きく分けて、言語による知能テストと図形による知能テストの二通りありますが、私は言語によるもののほうか知能指数をより正確に表現できると思うのです。というのは言語は知能そのものだと言っていいと思うからなのです。

言葉か正しく使えて、その言葉の教が多い子どもほど知能か高くなっています。知能は言葉によってつくられるということは、今では学者の間でも定説になっています。知能というものは、かって

は生まれつきであると言われていたのですか、幼児期につくられるということもわかりました。幼児期に言葉によって形成されることもわかったわけです。

ですから言葉の教育をしっかりやるということが、知能を正しく発達させる道なのです。そして言葉の中でも最も安定したものが文字ですから、子どもに文字を使わせることが一番の近道なのです。文字を知ることによって、子どもがひとりでどんどん学習ができるわけです。

体験ということが大事ですし、言葉を使ってその体験を表現するということが、人間としての知能を向上するのに役立つのです。できるだけ生きたいろいろな体験をさせるということは、親が子ども対してやれる最良の教育ではないかと思います。

ペーパーテストで知識を詰め込むよりも、もっと基礎になる生活のまわりのさまざまなものを、体験をさせることのほうが大切です。体験させるだけではなく、質問をして考えさせることが大事です。これによって、子どもは「観察」して答えることになるのです。

言葉を通さないと、ただ見るだけでは「見れども見えず」ということになるわけです。私たちは毎日同じ場所を往復していて、道にあるものを見ているはずなのに、何があったかと聞かれても答

えられないものがたくさんあります。それと同じことです。

ポイント:赤ちゃんのうちは世界は家庭の中だけですから、ヨチヨチ歩きができるようになったら図書館でも美術館でも動物園でも、いろいろなところへ連れ回して世界を広げてやることです。連れて歩いてさまざまなものを見させ、感じさせ、場合によっては質問して考えさせる、これが一番能力を伸ばすことなのです。知識を詰め込むのではなくて、考えさせることです。

●……自立した人間にするには

真の知識は、言葉、つまり読書によって蓄積されていくと信じています。息子に漢字教育をした動機もそこにありました。小さい頃から将来は宇宙ロケットの研究をやりたいと言っていましたが、それをするにしても一番大事なことは読書であると思っていましたので、本を読む力をつけてやったのです。

「ぼくがどんどん歩いていくと、お山が逃げていくよ。ぼくは強いんだな」

これは息子が二、三歳のときに言った言葉です。山が逃げて行く？　おかしいこと言うと思いました。ところが実際に山のほうへ一歩進むと山が後退したように見えるのです。

私たち大人は山が動くなどということはまったく考えませんが、子どもにはこういう素晴らしい観察力があることを知ったのです。経験が豊かになって、表現したいものが頭の中に渦巻いている、幼児期とはそういう時期なのです。

息子は中学から慶応の普連部に入り慶応大学に進みましたが、慶応高校で三年生になったとき、進路で意見が分かれました。妻は医学部へ入れたかったようですが、息子は工学部に行きたいというのです。小学校の時からそういう方面の本ばかり読んでいましたから、ずっと工学部へ進むと決めていたようです。

それで妻に「一生のことを親の希望で決めちゃいけない。本当にやりたいことをやらせてやろう」と言って、工学部に行かせました。ロケットの研究をすると企業から奨学金がもらえるということで、それをもらって勉強しました。

親としていろいろ忠告するのはいいことだけれども、最終的には子ども自身に決めさせるべきだ

と思うのです。自立して育った子どもは、自分の道をしっかり見つめていますから心配することはないのです。

私は自分の息子に幼児から漢字教育をして、読書力をつけてやったことがよかったと確信していますから、自信をもってお勧めできるのです。これは、実体験に基づいていることなのです。

●……親子で一緒に漢字教育を

漢字に対する興味をどうやって子どもに植えつけるか、などということはまったく考えなくていいのです。漢字に対する興味は赤ちゃんのときから持っていると信じてください。

押しつけたり教え込もうとさえしなければ、子どもに特別なことをする必要はないのです。何もしないぐらいの気持ちでいいのです。

お使いなどはどんどんやらせるほうがいいのです。卵を五個とか、牛肉を三〇〇グラムとか、紙に書いてやりましょう。ただ言葉にして話すだけでなく、書いて見せてやりましょう。

いろいろな機会を通して、できる限り漢字を使うようにするのです。漢字を毎日使っていれば、それこそ幼稚園の三年間で一〇〇〇字ぐらいの漢字は識別できるようになります。家庭で子どもと一緒になってやればいいのです。

ただし、私はたまたま子どもが興味を持てるような教え方を知っていましたからできましたが、教える側にも漢字の知識がなければうまくいかないでしょう。そういう意味では親も子どもと一緒になって学習する気持ちが必要だと思います。

何よりも注意しなければいけないのは、間違った教え方をすることです。そうなると、始めは興味をもっていてもすぐに嫌になります。教え込むのではなく、言葉や文字を自然に使って親しませることが最も大事だということを常に順に入れて置かなければなりません。

幼児期というのは、いろいろなことを吸収する能力が大人には想像できないほど高いという認識も必要です。